

# 法界と衆生

——和讃の諸問題——

金子 大榮

今日は高僧和讃に入ってから、第三回目です。題目は「法界と衆生」ということにしておきましょう。法界、わかりますね。法の世界、それから衆生。高僧和讃をずっと朗読いたしますという、最初に申しました安心同一ということ、それから発揮各説ということが自ずからわかるようである。安心同一ということは、高僧和讃を通じて必ず出てきますことは、「煩惱具足の凡夫」であるとか、「生死罪障のわれら」であるとかという言葉に対して、如来の本願ということが出てくる。それが、ずっと七高僧のどの和讃にも欠かせなく出てくる。それが安心同一ということでありましょう。さて発揮各説ということは、言い換えれば七高僧それぞれに特殊な問題があつて、その問題を解くために、本願を信じ念仏を申すということになられたということでもあります。その発揮各説のことは一人ひとりについて見ていくべきでありましょうが、今、高僧和讃を読むにあたりまして、だいたい印度、中国、日本と、こういうふうに連続してきたことに関して、その三国の高僧において重点になっているものは何であるかということへ着眼を試みたい。

「七人の聖者」ということで、『晚学聞思録』にも発表しておきましたんですが、あれはあの頃、ここで七高僧の話を書いた。そのときに気がつきましたことは、印度は仏教の発祥地である。つまりそこで生産したのである、仏

教は印度で生まれたのであるということである。中国の仏教はそれを移植したのである。だからして原産地は印度にあって、それを移植したものが中国の仏教である。日本はそれを輸入したのであって、できたものを「これは結構なものである」ということで日本に輸入したのであると、こういうことを話したのであります。それはそれでよいのであります。しかし、それは更に何を意味するかということをは考えてみたい。そういたしますと、真宗学といたしまして、明らかにしておかねばならない問題は多いが、三つある。或いは人間として考えておかなければならぬ問題であるといつてもいいでしょう。第一は自然と人間との間柄である。自然を背景として人間というものは出てきて、自然の内に育った人間、その人間が今では自然を征服するというようなことになって、改めて自然と人間ということを考えなければならぬことになってきておるようでありますが、しかし、それは当然真宗学者だけではない。人間として考えなければならぬ第一の問題であると言つていいのであります。名づけて世界観と言おうか。世界観の問題があるわけであり。その次に来るのが、人間というものは人と人との間柄によってできておるのであります。人間というのは、自分とか、他人とか、親とか、子とか、色々な関係によって成り立っておる。それを今の言葉では社会といひましようか。人間にとっては社会というのが一つの問題になってくるはずである。世界観に対して社会観と言つてもいいだろう。それからもう一つは自分というものであります。その社会の一員となっている自分。また、自然を變形させて人間生活が営まれたと言ひましても、その人間一人としての自分。「自己とは何ぞや」と、こういう問題がある。この三つの事は互いに関わり合つておりまして、結局一つがわかれば、或いは一つをわからせるためには、他の二つをハッキリさせなければならぬということでもあろうけれども、とにかく合せてみると、その三つの問題があるわけであり。ます。

そういたしますと、七高僧というものを思いながら、自ずから三国の高僧方の問題になっておるといふことができ。すなわち、印度におきましては自然、その自然を法界というのでありますが、その法界というものと、それから

それに対する人間、衆生というものが如何にあるべきかという、それが最初の問題であったに違いない。それは時によれば七高僧の人々にとっても、そういうことが最初の問題であったといってもいいかも知れませんか。私はあまり言わないですけれども、仏教のことを話す人はほとんど必ずというていいように、そもそも宇宙の根本原理は何かということを行います。宇宙の根本原理などはどうでもいいというように思いますけれども、しかし、ああいうことから言わなければ済まないというところに、すなわち自然を背景としておるところの人間というものが、つまり自然を無視するというわけにはいかない。それが発祥地としての仏教、仏教というものも、もともと自然を背景として日常生活を営んだ、その人間が如何にあるべきかということから出発したに違いない。こう言っているのであります。

しかし、中国にそれを移植した時には、中国人には一つの問題があった。中国人の問題というのはいったい何であったであろうか。四書五経というものがあって、そうして儒教というようなものが、儒教だけでない、諸子百家というような色々な説がありますけれども、それで普通はもちろん世界観も説いてありますけれども、だいたいは政治、人間社会、その人間というのは如何にあるべきかということの問題にしておたように考えられます。だからして仏教の立場からいえば、その社会というのはいったいどうあるべきかということ。こう考えますと、これも現代としては随分厳しい問題であって、社会というものに対していったい仏教はどう考えるのであるかということ。それが今でも問題になっておるということを思いながら、少なくともこの曇鸞・道綽・善導という三人のお方はそういうことが問題になったに違いないということを考えることができる。

そういたしますと、日本の源信・源空の二人は結局自分の問題であって、いったい自分はどうすればいいのであるかということになってきておるように思います。したがって七高僧を明らかにすることは我々の現に与えられたところの問題を解いていくということにもなるであります。そうして高僧和讃を通じて、そこに三つの問題を取り上

げて、それがどういふふうを考えられてきたかということ、ここで話ししようと思うのであります。

それで龍樹・世親の二人によって問題となったのは、すなわち法界と衆生ということである。その法界と衆生というものについて考え方がいくらか違う。龍樹の教学は約法ということでありまして、「因縁所生法、我説即是空」とあります。いわゆる大乘教、大乘教というものは縁起の法を説く。縁起の法はすなわち空である。色即是空ということとを説こうとするのが、それが大乘の教えであります。龍樹の字は殊に空観というものの意義を明らかにしておるということが、読めばわかるのであります。その空観において問題となってくるものは菩薩道というものである。一切空であるからして執着してはならない。しかし我々はその空に達することができなくして、有とか無とかという、いわゆる有無の邪見と申すてありますが、その有無の見に執えられる。その有無の見に執えられずに自利利他の道を求めなければならぬ。自分もそれによって救われ、人もそれによって救われるという、自利利他の菩薩道というものを求めなければならぬ。

その菩薩道というものを求めるためには不退転地というものが要求される。和讃で見ますというと、第六首目に不退の位ということが申すてありますが、これは龍樹の代表的著作としては、「智度十住毘婆沙等」と申すてあります。『大智度論』と『十住毘婆沙論』、これが龍樹の代表的な著作であると言っているのではありません。もちろん龍樹思想を明らかにするものは、『中論』とか、『十二門論』とかいうものがありまして、今日、龍樹教学といえは必ず『中論』、また『十二門論』というものは『中論』を手短かにしたようなものでありますから、結局『中論』、『中論』の研究というものが、今でもこの学校でも申すてありましようが、仏教学としては『中論』。したがって、空、それがやがて禅に繋がるのでありますから、その空観というものが、つまり大乘仏教の根本原理となっております。しかし、私たちに親しまれるのは、これは専門家としては、むしろ『中論』でありましようけれども、龍樹という人はどんなことを考えておったのであるか、どういふことを我々に教えるのであるかということになれば、「智度十住毘婆

沙等」で、まあ「等」のなかに何が入るかは問題としまして、『中論』、『大智度論』と『十住毘婆沙論』というものがあります。これはこの学校で勉強して大学院でも入って、仏教学なり真宗学なりやるといふ人ならば一度は読んでおいた方がいいと思います。仏教の書物を学びたいという人に対して、私は必ずといっていいほど、經典では『大涅槃経』、まあ『涅槃経』を読むことだね。もちろん『華嚴経』も読んで欲しいのですけれども、しかし『華嚴経』を読んでも、「華嚴」というものはどういうものであるかだけしかわからない。『大涅槃経』を読むというところ、あらゆる仏教がわかります。あらゆる仏教を大乘的に説いたものが『大涅槃経』ですから。だから『大涅槃経』は一切経でありまして、今日原始仏教とか色々言いますが、その原始仏教を大乘精神で説いたものが『大涅槃経』ですから、『大涅槃経』を読めば仏教とはどういうものであるかということがほぼわかる。但し、はなはだ難しい。

『大涅槃経』を、本当にどこを出しても解釈ができるということは、或いはちょっとできないことかもしれません。それに対して、論としては『大智度論』百卷、これは読めばわかる。そして面白い。どんなことでも書いてある。私の子供の時に父親がよく言うたことがあります。何でも話しをして、それがどこに書いてあると人に聞かれたら『大智度論』に書いてあると答えさせれば、たいがい間違いない、ということがあります。それほど色々面白い話が集まっておりますし、考えさせられることも多いんです。だから『大涅槃経』に取りつけないければ、『大智度論』を読んで、しかし『大智度論』百卷、これは相当に骨がおれます。はじめの三十卷、『大智度論』は『大品般若経』の解釈であります、その序品というものがありません。序品だけの解釈が三十何巻あります。それだけ読めばたいがい後は推して知ることができるであろう。中国でも現在そういうふうと考えておるものと見えて、序品だけの三十何巻分だけを印刷して出ている綺麗な本があります。

それから『十住論』は、そうたくさんないものでありますし、殊にその「易行品」というものが真宗では大事な一章でありますから、これはもうずっと目を通しておかないというと、『十住論』第九に「易行品」が出てくるのであ

りますけれども、この「易行品」というものはどういう性格のものであるかということを行うためには、『十住毘婆沙論』を見ておく必要があるのです。その「易行品」に問題となるものは、どうしたならば菩薩道に不退転であることができるかということであり、色々な難行をしなければ、すなわち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧というような六波羅蜜の修行をしなければ仏になることはできない。すなわち菩薩道は完成しない。それは容易ならんことである、こういう難しいことはやらんでもいいのではないか。要するに自分さえ救われればいいのではないか、一人もこの大乘精神を普及させるということは容易なことではない、ということになると小乗になってしまう。声聞になってしまう。声聞になってはならない。声聞になってはならないということは、言い換えれば煩惱の生活のなかに入ってすね、世間に入って世間に染らないということが非常に大事なことである。世間を見捨ててしまうのは、或いは仏教はそうであったかもしれない。お釈迦様の原始教団というのは世間を見捨てて、そして出家だけで賑おうておるといふことである。それでは乗物が小さい。大乘精神は世間を捨ててはならない、或いは欲望も捨ててはならない。怒り腹立ちというような、そういうような人々をも、そういう心も捨ててはならない。なんとかそれを純化して、そして煩惱を菩提へと導かなければならない。そういうことは、はなはだ困難なことであって、ともすれば地獄へ墮ちる。つまり愛欲というようなものを、どこまでも抑えていくことになれば器が小さくなる、小乗になるし、それにまかせれば地獄へ墮ちる。その中間を行かなければならないが、それがはなはだ難しいことである。そこを行くのが不退転といふものである。その不退転は、特に不退転地、地と申す。その不退転といふ言葉には住不退転とかね、或いは不退転地とかいふ言葉が用いられてあることを私たちは忘れてはならないのである。

地といふもの、境地といふものがある。例えば学者といふものであれば学者といふ境地が、理屈をいうときになれば小学校の生徒でも学者です、勉強してますからね。けども小学校の生徒では学者と言わない。大学に入って大学

を卒業したからといってすぐ学者とはいえない。何となれば不退転地、不退転地というものがある。「地」というのは、これは儒教の言葉であります。これを学ぶものはこれを好むものにしかん、これを好むものはこれを楽しむものにしかん」という言葉があります。だから勉強しなければならんなどと言ってる間はだめなんである。好きになった、とにかく本を読むのが好きになったということになって、ようやく凡じゃなくて聖者と言われることになるであらう。それから「好きなだけどもね、どうも忙しくて」というようなことでは、まだ本当に聖者にならない。聖というのはそれを楽しむ、勉強することが楽しむことになって、それが地というものであります。境地というような言葉を使っていますが、つまり境地というものが、仏教だけではない、万の道というのは、楽しむところまでいかなければ不退転地ではないのであります。だからその不退転地にならないと後戻りする。すれてしまうということになるのであるが、どうしたならばその不退転地を持つことができるであらうかという問題に対して、そこに難行・易行の説が出てくるのであります。本当に仏道を修行することとは、菩薩道を完成することは容易ならぬことであって、それが難しいということでは問題にならない。それでも、どうしてもそこをなんとか手短かに切り抜ける道がないものかというならば、仏法には難行・易行の道、難行の道と易行の道があって、その易行の道というのは称名念仏、恭敬の心に執持して称名念仏することである。念仏はすなわち不退転の道であると、こう説いたのが『十住論』の思想でありまして、その心をもってみれば『大智度論』もそうであるということができるのであります。

これは今までしばしば話したことで、どこかに書いておいたでしょうから、まあ今日は繰り返しますまい。ともあれ、その空観という法界、空観というのは法界観であります。もの皆空であるということである。したがって衆生も空、空であります。今の言葉でいいますと自然の法、万物の或いは宇宙の根本原理ですか、もの皆の成り立ち、もの皆の成り立ちにしたがっていくところに菩薩道というものがある。菩薩道を求めるためには不退転地でなくてはな

らない。その不退転地に達するためには念仏よりほかに道がないのである。こういうふうの説くのが龍樹の教学なのであります。それだけ言えば、くどく言いましたですけれども、そう思うて龍樹菩薩の和讃十首を読んでみましょう。

本師龍樹菩薩は 智度十住毘婆沙等

つくりておおく西をほめ すすめて念仏せしめたり

とあります。どうでも念仏でなくてはならないとは言わない。「つくりておおく西をほめ」でね、西方の弥陀の浄土というものがある、その浄土に往生するために念仏する、その念仏するということが不退転の道であると。すなわち「つくりておおく」という、「つくりておおく」というところに、『智度論』にも、『十住論』にも専ら念仏を勧めてあるということはない。ただ「つくりておおく」というところに龍樹の立場があるわけであります。だから、

南天竺に比丘あらん 龍樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべしと 世尊はかねてときたまう

これが、すなわち空であります。

本師龍樹菩薩は 大乘無上の法をとき

歓喜地を証してぞ ひとえに念仏すすめける

念仏することによって、これで大乘菩薩の道を完成することができるという歓喜の境地に至ることができる。みな『十住論』に出ておるのであります。

龍樹大士世にいでて 難行易行のみちおしえ

流転輪回のわれらをば 弘誓のふねにのせたまう

本師龍樹菩薩の おしえをつたえきかんひと

本願ころろにかけしめて つねに弥陀を称すべし

不退のくらすみやかに えんとおもわんひとはみな

恭敬の心に執持して 弥陀の名号称すべし

と、こうあります。ややごてごて言うたようではありますが、龍樹の教学如何ということになって『智度論』とか『十住論』とかいうものから、ずっと見通してきますというところ、今申したようなことがはっきり言えるんですが、それが和讃にも、その心持ちで和讃を拝読しますれば、和讃には自ずから、宗祖がそういうことを考えていらしたかどうか知らないけれども、とにかく和讃の上にも龍樹教学というものが自ずから感じられるように詠われておること、まことに意味の深いものだと思うのであります。

ところがこれに対して世親は少し違うのであります。世親の教学は唯識であります。空観と唯識というものは印度における二大仏教でありまして、印度の仏教は、要するに瑜伽と空観、龍樹は空観を説いて世親は唯識を説く。龍樹教学というものと世親教学というものとはどう違うのであるかといったら、これは仏教学者の大きな問題であります。はたして違うのであるか。昔の学僧では龍樹の精神を受け継いだものが唯識であると言っております。そうしますと世親は龍樹に対して別の考えを出そうとしたわけでもないということが言えるかもしれませんが。しかしながら空観というと、もの皆があるがままたに見る、あるがままたに見るといって、何か思想が客観的であろうであります。唯識はあるがままたに見るといってなして、自分においてこれを見る。つまり自覚において、いわば主観的と言います。うか、或いは主體的と申しませうか。何かその違いがあつて、その二つのものの考え方というものが龍樹・世親だけでなく、いかなる所にでも、中国に移りましてもその二つの傾向がある。或いは現代においても、その二つの傾向があると、こういっていいんでしょね。

自覚ということ言えば、自分の上において、もの皆を解していこうというんですから、そこで唯識という教学が出てくる、空といい、因縁といいましても、すべて我等の意識の上においてのみ成立することではないであろうかと

いうことであります。したがって唯識も、もちろん菩薩道であるに違いありませんけれども、まして龍樹の空觀というのは菩薩道である。空なんですからね。またこれが仏であると捉えられるものがあってはならない。ですから仏に成る道が菩薩道であります。成仏道といえども菩薩道のほかにない。菩薩が修行して仏に成るのではありませんかと  
言いましたも、しかし仏に成ってしまうというのではないので、菩薩道の内に、菩薩道そのものの内に成仏道がある  
と言わなければならぬのですが、唯識ではそうでない。唯識では成仏、仏に成るといふことがあるのである。菩薩  
の内では修行中ではどうしてもできないことが、仏の寛りを開いたときに始めてできるものがあるのだというふうな  
ことが説かれております。それが、著作の上においても自ずから出てきまして、そして真宗では『浄土論』でありま  
すが、その『浄土論』では「世尊、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生ぜん」と、その「我」、  
その「我」という一言がですね、唯識では非常に重要なものなのであります。そこから曾我先生の「法蔵菩薩は阿頼  
耶識なり」というお考えも出てくるんだろうと思うんですが、ともあれ「つくりておおく」ではなく、

釈迦の教法おおけれど 天親菩薩はねんごろに

煩惱成就のわれらには 弥陀の弘誓をすすめしむ

とあります。その煩惱具足の、煩惱成就のわれらの為にというところですね、一つ決定的なものがあって、したが  
って浄土が「唯仏与仏の知見で、虚空のごとくして广大である」とかいうようにして、浄土のことが、すなわち浄土  
往生のことが和讃を拝読しましても明らかにしておるのであります。

これをもっと近いところで申しますと、今日この大谷大学におきましてもですね、そういう傾向の一つの問題があ  
ると思っております。仏教学から真宗学へであるか、或いは真宗としての仏教であるかという自ずからその傾向が  
あるでしょう。学校の先生方のお書きになったものを見ますというと、仏教学の方では仏教から真宗へということに  
骨をおっておられるように思うのであります。まことに有難いことでありまして、その行き方の根本を尋ねれば、い

わゆる龍樹系であると、こういっていいでしょう。龍樹には始めから浄土往生なんてことは考えておらない。ただ念仏というのは仏教精神というものをどうしたならば完成することができるかということでありますからして、その仏教精神というものは、念仏によって成就するのであるということであります。往生浄土というようなことは、言うてないことはないんですけども、龍樹としてはそう必要でないでしょう。もっと近いところで申しますと、清沢先生の考え方などではね、有限無限との関係ということを言われまして、したがって有限と無限との対応というようなことを言われるときには、言うまでもなく念仏、或いは恭敬の心、精神感情というものが予想されておりますけれども、しかし往生浄土というようなことは必ずしも願われておらないように思います。仏様のおいでになる所が浄土でないかというふうな、そういうような考え方になっておるようであります。それはそれとして重要な思想であるに違いないのであります。だから真宗の仏教的解釈ということもこの学校では言うておられることもありませぬ。

ところが私などのように真宗学なんてものだけに凝るといって、かえって真宗としての仏教、真宗によって初めて見開かれる仏教、仏教というものは真宗にならないというところ、もう一つ完成しない。仏教と言いますが、原始仏教と言いますが、大乘仏教と言いますが、何かもう一つ未決定のところがあって、したがって真宗まで来て、初めて翻ってそこに大乘教というものの意味がある。そこに原始仏教の意味もあるというふうなことが見開かれてくるのではないであろうか。しかしそこにおきましても、真宗として、真宗の眼によって見開かれる仏教というもの、これが非常に大事なことであります。仏教は仏教、真宗は真宗と、こういうことであってはならないのでないでしょうか。やっぱり歴史的に申しまして、仏教という大きな流れのなかから浄土教というのは出てきたのですから、浄土教は仏教という背景を持つものでなくてはならない。しかしなぜ浄土教が出てきたかと言えば、浄土教でなければ仏教というものの意味は十分に明らかにならなかったんだということではなければならぬでしょう。そういうことを思いますと、仏教から真宗へという、そういうことを明らかにしようとするのなら、我々は龍樹の教学をもっと



求むる心まことなれば、そこにもうすでに与えられたものがあるのである。こういうことであります。私はかつてある人に、あなたみたいにもしお寺参りするのがもう習慣になっていて、そしてお寺へ行ってお話が始まっても居眠りしているような人よりは、何とか救われたいということで熱心な気持ちでもって道を求めてお寺の門の所で死んでしまうたとすれば、私はそのお寺で居眠りしている人よりは門の前で倒れた人の方がお浄土に往くような気がしますがね、と言うたことがあります。先生は笑って「どっちも往かないんだ」と言われた。どっちもお浄土に往かないのが本当かも知れませんがね。しかし、何かそこに道を求めて、そして求める心をもって倒れたんだというときに、そこに拜まずにおれないものがある。で、龍樹の書物の上にはね、何かそういうふうなものが感じられる。それが「つくりておおく」というような感じではないだろうか。龍樹は何か不退転の境地というものを求めておられた。そしてそれは念仏よりほかないのであるというふうに考えておられたというところに、そこに第一祖と言われるものがあるのではないであろうか。それが天親に来てはつきりとして、それで「我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命して安樂国に生まれんと願ずる」ということになつたのであるということでもあります。

近頃、真宗教学というのが問題になっておりましてね。清沢教学なんてことをいうがそんなものはない、みんな親鸞教学でなくてはならんと言う。いや宗派を支えているものはそうではなくて蓮如教学である、というようなことを言う。これはいっぺん話しましたかな。じゃいっぺん清沢先生に聞いてみよう。「あなたの教学は」と。「わしの教学は真宗教学だ」と言われるに違いない。親鸞聖人に向つて「あなたの教学は」と言えば、「わしの教学は真宗教学だ」と言われるに違いない。だからその人にきいてみれば真宗教学よりほかかないんですが、しかし親鸞教学と言っても少しもおかしくないんです。そして私たちが清沢教学と言われても別にそう変にも思わないんです。ところが蓮如教学と言われると変な感じがする、これは一体どういうわけなんだろうね。そういうところに一つ問題があります。蓮如上人は蓮如上人としての御苦勞があり、蓮如上人としての求道があり、でありますけれどもね。しかし何か、い

わゆる發揮の説とでもいまいましようか、その時代の何か問題を背負って、そしてそれを解こうとするところからやっばり、満之教学とか、さらには親鸞教学と言わねばならないものがあるんでしようね。しかし親鸞聖人に向って「あなたの教学」と言えば、大聖の真言、大祖の解釈ということがありまして、「わしが教えというのは三部経よりほかにないのである。わしが学問というのはこれは七高僧の生き方よりほかにないのである」、だから七人七色の学を中心にして考えてまとめてみるというところ、印度の二人の上にあった問題は法界と衆生ということである。この大自らの内にあって、この大宇宙の内にあって、そして人間がいかにあるべきか。人間が人間としてその自然の道理にかなつたことを実践していかなければならぬ。だから一切空ということが自然の道理であるから、その道理にかなつた仏道というものは、それは不退転地を求める菩薩道でなくてはならない。しかしそういうことを言うことも、全ては自分に具わつた問題でなくてはならないんだから、そこで天親菩薩は唯識と言ひ、そしてそれによつて仏に成るのである。それが一切の衆生を担うていくところの道であるということになつたのであろう。

こういたしましたして、印度の仏教は生産地の仏教である。したがつて龍樹菩薩、天親菩薩の真宗もまたそこによつて始めて生みだされたものであるということを示したのです。かつて申したのですが、今はこの問題はすなわち自然と人間との問題である。言い換えれば法界と衆生との問題だ。そしてそれが今日においては改めて重要な問題になつてきた。人間の知識が進んで、そして自然を破壊してしまつて、アポロで月の世界に行つてみたけれど仏様はいなかつたというようなことを言うときにですね、いったい自然というものは何であるか、要するに無生物であつて人間の知識でどうにでもなるものであると云うのであるか。それとも、はじめに畏敬感情があつたんだということが、それが宗教でありましようね。畏れ敬う感情、敬虔感情というものがある。言い表わせば、南無阿弥陀仏ですね。それは、自然はいつでも人間を助けるものであるということを示しておるわけではないんでしようね。時によれば地震があ

って、ずらずらと皆死んでしまうというようなこともあるかもしれない。時には雷が落ちて、そして全滅するというようなことがある。それは畏れであります。畏れであります。その畏れに対して敬う、畏れ敬うということにおいて、そこに法界と衆生との間柄というものができてくる。敬虔感情とか畏敬感情とかということを経験して、宗教心であると言いますことは、いつでも自然というものは人間を助けるものであるということを経験しておるわけじゃありません。人間を助けるということは人間が楽になる、人間生活が楽になるということではない。人間を助けるということとはもっと精神的な意味をもっていて、したがって自然の大いなる恵みということとは敬虔感情、畏敬感情においてのみ理解することができるのであります。その法界と我等ということが課題になって、そして龍樹・天親という二菩薩が代表して出てこられたということは、これは大きな歴史上の事実といわなければならぬのであります。そうしてそれが中国に來まして、曇鸞・道綽・善導という御三人の上にどう出てきたかと言えば、今度は私は人間社会というのが中国では問題になったに違いないということを思うのであります。社会というものに対して、仏教徒はどう考えておるか、いったい何も考えなかったのであろうか。それとも少なくとも中国の仏教において殊に曇鸞・道綽・善導の御三人の書物を見ると、さて世の在り方、人間の在り方、それが如何にあるべきものであるか、今日の社会主義者のいうようなことであるかというところが問題になるであろうと思っております。それが幸いに『教行信証』を読んだだけではわからないことが、高僧和讃を読んでもみると、龍樹・天親のところであまりはつきりしておらなかった、その事柄が御三人の和讃の上に出てくるということに、着眼してみたいと思っております。それはこの次の課題にしておきます。

(本稿は、一九七〇年九月二十九日の大谷大学における集中講義「和讃の諸問題」の筆録である。文責編集部)